

仮面ライダージオウ リ・マジ (仮)

火野ミライ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「気づいた時には、遅かった。」「何もか終わった後だった。」「何も、出来なかった。」「せめて■■■■■■には、同じ思いをしてほしくないから。」「だから、ちよつとプレゼント。」「後は、任せたよ・・・」

—— 仮面ライダージオウ・・・

## 目次

第1話 「スタートタイム」	2018	1
第2話 「たたかうかくご」	2018	8
第3話 「ベストマッチコンビ」	2018	17
第4話 「フルスロットルドライブ」	2018	26

第1話 「スタートタイム 2018」

どこか、薄暗い場所・・・

そこに、俺？私？・・・僕は存在していた・・・

前世の事は、何故か分かる。けど、今生の事は・・・

そもそも僕は、男？女？・・・

何か、大事な事を忘れているような・・・

ふと、手元を見る・・・

左手に何かを握っていた・・・

ストップウォッチのような、黒い物体

前世の僕が教えてくれる。これは、【ブランクウォッチ】：

次に、周りを見る・・・

そこには、カラフルな怪人？怪物？・・・

怪人が僕を見つめている・・・

僕は、恐怖と懐かしさを感じていた・・・

手元のブランクウォッチが光り、知らない【ライドウォッチ】に

なる・・・

気が付いたら、リングパーツを回してボタンを押してい

た・・・

《 ノイズ！ 》

発行と共に、怪物がウォッチに吸い込まれていく・・・

いや、僕と一つになった気がする・・・

怪物が一人？一体？もいなくなると、空間が鏡が割れるよう

に弾けた・・・

2018

「眩しい・・・」

真つ暗な場所から、急に日の光が当たる場所に来るとダメージをう

けるよね。

「え……」

目が慣れてきたころ、あるポスターが目に入った。  
驚いた理由はポスターではなく、今日の日付だった。

――〔2018年9月2日〕

まだ平成の時に、今手に持っている物が、キーアイテムになる作品……

【仮面ライダージオウ】の放送日だったからだ。

【仮面ライダー】

昭和から始まった特撮番組。

時代を渡り、平成そして令和の子供と一部の大人が見ているシリーズ。

詳しくは、ネットでググってね。

その中でもジオウは、平成ライダー20作品記念。

最後の平成ライダーとして、日朝を盛り上げた仮面ライダーで、王だった。

少なくとも前世の僕は、平成の2期を追っかけだったみたいです。  
次に、僕の容姿について。一言で言うなら、幼女かな？

「自分について、分かる事が少ない……」

本当、どうしよう。これって転生？タイムスリップ？

分かっているのは、今生については何もわからないこと。多分、記憶喪失だと思う。

財布もないし、身分証明書のものも持ってないしなく

キヤアー！ ウワアー！

なんか、聞こえた気がする。

……ついでに、ジオウの主人公【常磐<sup>ときわ</sup>ソウゴ】化している気がする。

「取り合えず、行ってみるか。」

この時の僕は、思いもしなかった。自分に待ち受ける、運命と言う未来に！

〈三人称視点〉

ビルが、爆発する。恐怖して何かから逃げる人々。

その元凶が、愉快そうに歩いている。

赤と青のアーマーに、戦争を思わせる意匠がある怪人。

機械的なフォームを持ち、右胸には「BUILD」の文字が刻まれている。

「た、助けて。」

その声を聞いた怪人は、少年に向かい歩を進める。

しかし怪人が少年を襲う前に、少年を助ける影があった。

灰色の髪に、緑色の目、少女と言うには幼い女の子が少年を助け出していた。

「逃げて！」

「う、うん。」

少年を逃がした後、女の子・・・今作の主人公が、呟く。

「何で、アナザーライダーが！」

主人公の呟きなど気にせず、攻撃をするアナザーライダー。

「うあー！」

最初の数発をよけるも、右ストレートが当たりそうになるその時。

「お前ごときが、我が魔王に傷をつけるなどおこがましいにも、ほどがある!!」

「へ?」

突然、横から現れた青年が受け止め、逆に吹き飛ばしてしまう。

「我が魔王、お怪我はごいませんか?」

「・・・魔王って、僕の事?」

「はい。しかし、今は説明している暇は、ごいません。」

「これを！」

何処からか、取り出した台座の上には、ブランクウォッチと

巨大な腕時計を思わせる白いベルト【ジクウドライバー】が置いて

あった。

「使い方は、御存知のはず。」

〈主人公視点〉

「魔王とかよく分かんないけど、やるだけやる。」

その言葉と共に、ベルトとウォッチを手に取る。

ウォッチはすぐさま、リング部分とボタンが白、本体？が黒の

【ジオウライドウォッチ】に変化した。

《 ジクウドライバー！ 》

ウォッチの変化を気にせずに、ドライバーを腰に巻く。

右手に持ったウォッチを前に出し、リング部分を回す。

そして、頭部のボタンを押す。

《 ジオウ！ 》

その後、左側のスロットに装填。ベルト頭部のボタンを押しロツクを解除。

その時、後ろに時計のようなエフェクトが出る。

何故か、体が崩れているような気がするけど無視する。

時計の針のようなポーズ・・・ソウゴと同じポーズを取り・・・

「変身！」

例の言葉を紡ぎ、ベルトを反時計回りに一回転させる。

この時、ベルトを中心に世界が一回転した気がするが、これも取り合えずこれも無視。

《 ライダータイム！ 仮面ライダージオウ！ 》

【ライダー】と言うピンク色の文字が、後ろの半透明の時計から飛びでる。

この時何故か、完全に僕の体が崩れた。・・・本当に大丈夫なのか、これ？

そんな僕を無視して、無数の金属製腕時計のバンドの輪の様なエフェクトが回転し

灰となって崩れた僕を、成人男性ぐらいあるジオウのスーツに変える？

あれ？ジオウって、肉体変化形のライダーだっけ？

前世の僕は、そこら辺については、詳しくないみたいだ。

最後に「ライダー」の文字が、マスクにセットされて変身完了！

「祝えー全ライダーの力を受け継ぎ」

時空を超え、過去と未来をしろしめす時の王者！

その名も仮面ライダージオウ！まさに生誕の瞬間である！」

僕に、ベルトとウォッチを渡してきた、黒ウオズの服を着た人が、本を片手に、祝ってくれました。　なんて言うか・・・

「ちよつと、恥ずかしい。でも・・・」

このタイミングで、「アナザーライダービルド」が立ち上がってきた。  
た。

「行ける気がするー！」

僕はアナザービルドに走りだし、右ストレートを当てる。

変身前と違って、同じぐらいの身長になっているから右胸に当てる事になる。

「思ったより、吹っ飛んでいった。」

そのまま攻撃を仕掛けようとするも、躲かれ逆に反撃を受ける。

何とか踏みとどまって、右足で蹴りを入れる。

あたったものの、今度は吹き飛ばずに反撃を仕掛けてきた。

取っ組み合いが続く中、左手から弾丸のような物が発射された。

それに当たり、今度は僕が吹き飛ばされた。

「そんなの、本編で使ってたじゃん・・・」

まあ、言っても仕方ないけど・・・

とか言ったら、さっきの弾丸みたいなのをチャージしている、アナザービルドいた。

けど素手だけじゃないのは、こっちも同じ。

《 ジカンギレード！ ケン！ 》

<sup>アナザー</sup>Aビルドが、弾丸エネルギーをこっちに向けて撃って来た。

けれどこっちは、ベルトからピンク色の「ケン」の文字が出てきて、その文字道理の、武器へと変わる。

ケンの中心には、「ケン」の文字がある【ジカンギレード】で弾丸を



弾く。

続いて撃ってくるも、武器にあるトリガー押しピンク色の光を纏わせる。

その状態のまま、弾丸を切り裂きながらAビルドに近づき、剣で切りつける。

吹き飛んでいったものの、すぐに立ち上がると跳びエネルギーをチャージし始める。

「うん？　これ、使えるのかな？」

遊撃しようと剣を構えた時、左腕の「ライドウオッチホルダー」にある、

リング部分とボタンが緑、本体部分が濃いめのグレーのウオッチ・・・

最初から持っていたウオッチが目に入り、取り出す。

リング部分を回転させてから、武器にセット。

《　フィニッシュタイム！　》

「使えた！」

そのまま、ジャンプで跳び上がりAビルドに迫っていく。

それに合わせて、弾丸を放ってくるけど・・・

《　ノイズ！ギリギリスラッシュ！　》

「はあああー！」

弾丸ごと、Aビルドを切り裂く。

・・・取り合えず、一時しのぎには、なったかな？

「・・・って、安心して場合じゃない。」

アナザーライダーになつてた人は・・・

振り返ってみても、そこには変身してと思われる人は、いなかった。

「流石は、我が魔王！　初陣にして、勝利を挙げるとわ。」

「え〜つと。　あんたは？」

「申し遅れました。　私は、ウオズ。」

「貴方に、使える者です。」

どうやら、まじウオズみたいだ・・・

それにしても・・・

「さっきから、魔王って何のこと？ それに、あいつはどうしてここに？」

変身を解きながら、質問を試みる。（この時も、一瞬体が灰になった。）

「説明でしたら、落ち着いた場所でしょう。 ついて来て下さい。」

「・・・分かった。」

まだ、事件は終わってない。

## 第2話「たたかうかくご」 2018」

どこか、人気のない公園。そこに、ウオズと名無き少女がいた。「この本によれば。君はこの先、時の王者に即位する為、覇道を歩む。」

そして世界は、最低最悪の魔王になった君へ恐怖で包まれる。「しかし何者かの力によって、時空が歪み非常に不安定になってしまっている。」

それにより、本来起きえないことが起き始めている。 さつきのアナザライダーもそうだ。」

---

場所は、変わり……

「うわあああー！ー！」

「助けてくれええー！ー！」

ジオウよって倒されたはずの、アナザーAビルドが、野球をしていそうな高校生2名を襲っていた。

Aビルドが、片方に透明のボトルのような物を向けようとしたその時！

「おらあー！」

「硬ってえ〜」

横から、ドラゴンの意匠があるスカジャンを着た茶髪の男性が、右ストレートでAビルドを吹き飛ばす。

「貴方は！」

「そんなことより、早く逃げろお！」

「は、はいー！」

高校生たちを逃がした男性は、Aビルドの方を見る。

「それにしても、こいつ。なんか、ビルドに似てるんだよなあ〜  
……まあ、いいか！ さつさと倒して、戦兔をみつける！」

♪

右側に赤い回転レバーがある黒いベルト【ビルドドライバー】を腰に巻く。

独特な音を出しながらやって来た機械のドラゴン【クローズドラゴン】が、

ガジェットモードになり、男性【万丈龍我】ばんじょうりゅうがの手元に来る。

ドラゴンの意思がある青いボトル【ドラゴンフルボトル】をクローズドラゴンにセットする。

《 ウエイクアップ！ 》

《 クローズドラゴン！ 》

そのまま、ベルトの装填し、レバーを回す。

ベルトから工場のパイプラインラインが伸び、そこに液体が溜まる。

液体が固まると、ドラゴンを模した装甲なる。

《 Are you ready? 》

ベルトから覚悟を問う音声流れるが、万丈は迷わず答える。

「変身ー！」

《 Wake up burning! Get CROSS

—Z DRAGON! Yeah! 》

前後にあつた装甲が、万丈を挟むように装着されていき、

最後に金色の炎が描かれた装甲を纏い、【仮面ライダークローズ】への変身を遂げる。

「行くぞー！」

---

場所は、戻り公園へ

「本来起こりえない出来事により、タイムパラドックスが起きています。

その影響は、既に我が魔王にも。」

「僕にも?。」

「はい。本来の歴史ならば、あなたの目覚めは数年後です。」

それがパラドックスにより今日に早まった。」

「ですが、御安心を！」

私が本来の歴史に近づけるべく、未来からやって来ました。君が無事、魔王への道をたどれるよう、私が尽力しよう。」

「……要らない。」

「……は？」

場面は、再び変わりクローズ達に。

「こいつ、戦い方までビルドかよー！」

Aビルドの戦い方に驚いている、クローズに向かって、

左足のバネで跳んで近づき、右足の無限軌道を回転させた状態で蹴る。

クローズは、簡単によける。

「いくら戦兔をまねようと、戦兔のような心が無きや意味がねえ！」

愛と平和の為に戦う俺は、負ける気がしねえ！」

そのまま、クローズのラッシュに押されていくAビルド。

「我が魔王、一体どう言うことですか!？」

「だって、僕がジオウになると未来の人たちが困るんでしょ？」

「だったら、このまま消えた方が……」

「それは、困ります。言い忘れていたけど。」

さっき倒したAビルドだけ。あれは、世界の融合によって現れたものだ。」

「世界の融合！」

「ああ。今回はビルドの世界と融合した為、Aビルドが現れた。

話を戻そう、アレを倒すには、元となったライダーとこの世界のライダーの力必要なんだ。」

「今まさに、今回融合したビルドの世界の龍のライダーが戦っているがね。」

「なんだって!」

「ぐわあ! 何だよ、やるじゃねえか!」

先ほどとは違い、赤の部分が茶色になり、青の部分が水色となっている、

剛腕の右腕と宝石の装甲を持つ、Aビルドに苦戦しているクローズ。

Aビルドが目の前に汚れた宝石を作り出し、右手で飛ばす。

「やべえ!」

吹き飛ばされたものの、何とか受け身を取る事が出来た。

そこに、主人公達がやって来る。

「どうしてこんな所に!」

クローズの疑問を聞きながら、少女はウオズに問いかける。

「ねえ、あいつを倒したらどうなるの。」

「何も、起きません。」

「じゃあ、ほっといたら?」

「被害は、もっと深刻なものになるかと。」

「………決めた。」

僕、ジオウになつて戦う!

「我が魔王?」

「魔王とか、世界関係なしに、ただやれる事をやりたい!」

《 ジクウドライバー! 》

《 ジオウ! 》

「へ? まさか、あの子が!」

少女は、ジクウドライバーを腰に巻き、ライドウオッチを起動させる。

ウオッチをベルトにセットして、ベルトのロックを解除。

「変身！」

「やつぱりい！ てか、あの子崩壊してるじゃねえか!？」

ベルトを反時計回りに回転させる。

《 ライダータイム！ 仮面ライダージオウ！ 》

クローズの悲痛な叫びを無視して、ジオウへと変身を遂げる。

《 ジカングレード！ ケン！ 》

「はあ〜〜！」

ジカングレードを手にAビルドに向かう。

「お、俺も！」

《 ビートクローザー！ 》

クローズも剣身にイコライザーのようなメーターがついている剣

【ビートクローザー】を手に向かう。

「はあ！」

「でえやあー！」

ジオウが切れば、クローズが攻撃を弾く。 ジオウが弾けば、ク

ローズが切る。

気づけばAビルドの姿は、元来赤と青の物に戻っていた。

「一気に決めぞー！」

「はー！」

《 Ready go! 》

《 ファイニッシュタイム！ 》

クローズがベルトレバーを回し、ジオウがウオッチのボタンを押し

てからベルトを一回転させる。

《 ドラゴニックファイニッシュ！ 》

「はあ〜ったあー！」

背後に現れた【クローズドラゴン・ブレイズ】を右手に取り込み、

アップパーと共に放つクローズ。

《 タイムブ레이크！ 》

「はあー！」

クローズによって空中に飛ばされたAビルドに向かって、ピンク色の【キック】の文字が並ぶ。

その文字を右足に収束させ、跳び蹴りを当てるジオウ。  
ジオウが着地すると同時に、Aビルドが爆散する。

「いえ〜い！」

「い、いえ〜い・・・」

それを見た、クローズがジオウにハイタッチを求める。  
困惑しながらも、それに答えたジオウであった。

---

先ほどの公園に、万丈を連れて戻ってきた主人公。

「それじゃ、自己紹介と行こうか！俺は、仮面ライダークローズ！

またの名を、プロテインの貴公子！バサ万丈龍我だ！」

堂々とポーズを付けて名乗っている、万丈。

しかし主人公は、顔を伏せてしまった。

「・・・」

「つて、無鹿よ！・・・つてあれ？」

万丈が顔を覗き込むと、少女が暗い顔をしていた。

「どうした？ おなかが痛いのか？」

「ううん。」

僕・・・自分についてあんまり知らないんだ。」

「・・・記憶喪失なのか？」

「それに、近いかも。」

「そうか・・・(あの頃の戦兎と同じか。)」

「ジオウ。仮面ライダージオウ。」

今は、情報交換をしよう。」

「分かった。」

---

・・・数分後

「もう一度言いますね。」



「おう。」

簡単に地面に描いた絵を手を持つ、杖で指しながら説明をする。

「僕の世界と万丈さんの世界。」

「うんうん。」

「万丈さんの世界が、僕の世界とくつつこうとしています。」

「うん。」

「その影響で、ビルドの偽物が登場します。」

「ああ。」

「こいつを倒すには、本物のビルドと僕の、ジオウの力が必要。」

「うんうん。」

「その為に、桐生戦兎さんを探すのが今の目標です。」

「なるほどお、分かった！」

「ふう〜。次は、万丈さんの方をお願いします。」

「どこから？」

「最初から、お願いします。」

「俺は、横浜の産婦人科で生まれた。s」

「すいません！ こっちに来る直前からお願いします。（ウオズどこ

行ったの〜！）」

「おお、分かった！」

---

〈万丈視点〉

俺は、何時もどうり筋トレをしていて、戦兎は、なんかを作ってたんだ。

そんな時だった・・・白いパンドラパネルがピツカって光ったのは！

「うわあ！」

「言った何が。」

その光吸い込まれると、気づいたらこっちにドツコつと落ちて来たんだ！

その後、戦兎を探してたらビルドモドキと戦って、お前にあつたん

だ。

〈三人称視点〉

「こんなもんかな？」

「なるほど。」

「なんか、分かったか！」

「僕には、分からないことが分かりました。」

「まあ、普通はそうだな。」

「いえ、今の話に重要なことがありました。」

「誰だてめえ！」

「私は、ウオズ。 ジオウの家臣です。」

「はあ？ (ジオウの菓子?)」

「それで、ウオズ。 重要な事って？」

「はい。 今の話が本当なら、仮面ライダービルド・桐生戦兔は確実に、

こつちの世界にいます。」

「それが、どうしたんだよ！」

「そつか。 こつちに居ない可能性もあったのか！」

「でも、どうやって合流するの？」

「それは、大丈夫です。 なぜなら・・・」

ウオズが何かを言おうとし時、少し離れたビルドが爆発した。

爆発したビルドの付近。 そこに、赤と青の靴を履いた男性がいた。

「最悪だあ。 まさか、事件を起こしたのがビルドの偽物なんてな。」

「しかも、スパークリングに似ているし。」

愚痴りながらも、ビルドドライバーを腰に巻き。

缶のようなアイテムを振り、プルタブを開ける動作でスイッチを押す。

起動した「ラビットタンクスパークリング」をドライバーに装填する。

《 ラビットタンクスパークリング！ 》

ベルトのレバーを回す。ビルドのライダーズクレスト型のライナーが現れる。

《 Are you ready? 》

「変身！」

ライナーが、男性【桐生戦兎】を挟むように動き、装甲を装着する。

《 シュワツと弾ける！ ラビットタンクスパークリング！

》

《 イエイ！ イエイ！ 》

【仮面ライダービルド ラビットタンクスパークリングフォーム】が、パワータイプし、スパークリング力を得たAビルドに立ち向かう！

「さあ、実験を始めようか！」

### 第3話 「ベストマッチコンビ 2018」

悲鳴を上げながら逃げる人々。 人流れに逆らい走る二つの影があった。

主人公と万丈龍我の二人だ。 二人の腰には既にベルトが装着されている。

「おいおい、マジかよ！」

二人の目の前には、戦争の為に作られた兵器【ハードガーディアン】が破壊活動をしていた。

H<sup>ハイド</sup>ガーディアンは二人に銃口を向ける。

「不味い！」

「つくー！」

《 ボトルバーン！ 》

《 クローズマグマ！ 》

《 ジオウ！ 》

万丈はオレンジ色のナツクル【クローズマグマナツクル】に  
黒色のボトル【ドラゴンマグマフルボトル】を装填し、ベルトにセツ  
トする。

その横でライドウオッチを起動する、主人公。

《 Are you ready? 》

「変身！」

二人がベルトを操作すると同時に、Hガーディアンがガトリングや  
ミサイルで攻撃する。

爆発の中から、八岐大蛇を思わせる八頭の龍が出て来て弾ける。

土煙の中から二人のライダーが姿を現す。

《 極熱筋肉！クローズマグマ！ 》

《 アーチャチャチャチャチャ チャチャチャチャアチャー！ 》

》

《 ライダータイム！ 仮面ライダージオウ！ 》

片方は【ライダー】の複眼を輝かせるジオウ。

もう片方は、灼けた鋼鉄に溶岩を思わせるメタリックブラックにオレンジのクローズ

【仮面ライダークローズマグマ】

「力がみなぎる！魂が燃える！俺のマグマがほとばしる！もう誰にも止められねえええ!!」

万丈の叫びと共に二人のライダーが駆ける！

「つく！また強くなりやがった。」

紅い装甲に手足にバネのパーツがあるビルド【仮面ライダービルド

ラビットラビットフォーム】

アナザー

Aビルドが初期の姿が複眼以外黒色になり、

【スマッシュボトル】を全身に刺していくのを、壁を支えに立ち上がりながら呟く。

「さしずめ、黒いジーニアスフォームか・・・」

最後に、それぞれ3本のボトルが複眼となる。

名づけるなら【アナザービルド ジーニアスフォーム】だろうか。

「つく！」

成分が入っていない、缶型アイテム手に取った後しまい、Aビルドに向かう。

Aビルドは背中に、戦闘機の翼を生やしてビルド攻撃を躲す。

上空からミサイルをガトリングのように撃ちだす。

「ぐわあ〜!!」

最初の数発は躲すも、躲しきれずに吹き飛ぶ。そこに追撃のキックがビルドに迫る。

「おらあ〜!!」

Aビルドの蹴りは、横から来たクローズの飛び蹴りで吹き飛ばされ失敗に終わった。

「大丈夫ですか？」

倒れているビルドに手を指し伸ばすジオウ。

「あ、ああ。」

状況がつかめないながらも、ジオウの手を取り立ち上がる。

「自己紹介は後でお願いします。」

「ああ。それじゃ、行きますか!」

《フルボトルバスター!》

《ジカンギレード! ケン!》

互いに武器を手に取り、Aビルドに向けて走り出す。

「うわ!」

ライオンの衝撃波を受けたクローズが吹き飛ぶ。

クローズ入れ分かるかのように、ビルドが大剣の斬撃をAビルドに当てる。

「何やってるだよ、やっぱサブキャラには、主人公の偽物は実が重すぎか?」

「お前だって!俺が助けなきや、やられてたじゃねえか!」

「俺はあの後、天つ才的な方法で逆転する気だったし。」

「あのく・・・っ!」

ビルドとクローズが言い争う中、一人で頑張って戦うジオウだった。

歴戦の戦士を追い詰めたAビルドに、戦士に成りたてのジオウが勝てるわけもなく、

不死鳥のように炎を纏い突撃してきたAビルドに吹き飛ばされ、変身解除まで追いつめられる。

この時、ブランクウオッチが二つ転がって行く。

「二つあ・・・」

なお、二人はその爆発音で気づいた模様。

「あいつ、子供だったのか・・・」

「戦兎、行くぞ!」

「ああ!」

ビルドクローズが攻撃を仕掛けるが、Aビルドは分身し、二人を追いつめる。

「つく、ジーニアスが敵に回ると厄介だな・・・」

「戦兎も、ジーニアスで！」

「無理だ、成分が・・・」

Aビルドの攻撃によって、初期フォームに戻った二人が、物陰に隠れながら会話をする。

「うん？ 戦兎これって？」

「こつちにも。」

ビルドとクローズの近くには、爆発の際飛んで行ったブランクウオッチがあった。

二人がウオッチを手にとるとウオッチに変化が起きる。

《 ビルド！ 》

《 クローズ！ 》

ビルドが手に取ったのは、リングとボタンが赤で本体が青色の「ビルドライドウオッチ」に

クローズの方はリングとボタンがオレンジで本体が青の「クローズライドウオッチ」へ変化した。

「なあ、戦兎これを！」

「ああ！」

クローズがウオッチを戦兎に投げ渡し、Aビルドに攻撃を仕掛ける。

クローズがAビルドを引き付けている隙に、主人公の少女に近づく。

「おい！君！」

「うっ！ あいつは？」

「今は、万丈が抑えてくれている。 これを！」

「ライドウオッチ！どこで？」

「君が落としたのを拾ってな。 それより・・・まだ、戦えるか？」

そう問う戦兎の声は、苦虫を潰したような声だった。

「はい！」

少女が立ちあがり、ベルトを腰に装着する。

《 ジクウドライバー！ 》

「ぐお！」

そこに変身解除まで追いつめられた万丈が転がってくる。その手には、銀色のドラゴンボトルが。

「万丈！（さん！）」

万丈に近づく二人。

「大丈夫だ・・・戦兎、ボトルが!!」

「!」

「これは・・・!」

万丈に近づいたビルド変身が解け、ラビットが金色に変わる。

ビルドドライバーからラビットボトルが抜け、ドラゴンボトルと缶型アイテムと共に空に浮かぶ。

アイテムが一つとなり、「クローズビルド缶」へ。クローズビルド缶は戦兎の手元に落ちる。

「最っっ高だ!」

「おいおい、マジかよ!」

「行きましょう!」

《 ジオウ! 》 《 ビルド! 》

ジオウとビルドのウォッチのリングを回し、ボタンを押して起動する。

「さあ、最後の実験を始めようか!」

「こうなったら、やってるやる!」

《 クローズビルド! 》

クローズビルド缶を振り、プルタブアクションをする。

そのまま、ベルトにセットしレバーを回す。

ジクウドライバーの左スロットにジオウ、右スロットにビルドのウォッチをセットし、

ベルトと上部のロック解除のボタンを押す。体が崩れるのを感じながら、ポーズをとる。

《 Are you ready? 》

ビルドドライバーから、覚悟を問う音声が流れる。

「変身!」

《 ラビット!ドラゴン!Be The One!クローズビ



ルド！イエーイ！イエーイ！」

万丈とビルドに変身していた青年【桐生戦兎<sup>きりゆうせんとう</sup>】が一つとなり、兎と龍を思わせるビルドへ

《 ライダータイム！ 仮面ライダージオウ！ 》

少女の体が崩れ、灰へとなる。灰はジオウへと形作っていく。

これまでとは違い、ビルドのラビットタンクを思わせるアーマーが出現する。

《 アーマータイム！ベストマッチ！ビ・ル・ドー！ 》

アーマーが装着され、最後に【ビルド】の文字が複眼となる。

ラビットラビットとクローズの要素を併せ持つ【仮面ライダービルド クローズビルドフォーム】

両肩は赤と青のフルボトルのような大型デバイスを装着した【仮面ライダージオウ ビルドアーマー】

二人の戦士が、並ぶ立つ！

「祝え！全ライダーの力を受け継ぎ、時空を越え過去と未来をしろしめす時の王者！」

その名も仮面ライダージオウ ビルドアーマー。

まず一つ、創造する天才物理化学者のライダーの力を継承した瞬間である！」

何処ともなく現れた、ウオズが祝う。その間に、戦兎がジオウに言葉をかける。

ウオズの祝福が終わると、三人が言う。

「勝利にの法則は決まった！」

クローズビルドがビートクロウザーとドリルクラッシュヤーを

ジオウが大型のドリル【ドリルクラッシュヤークラッシュヤー】を手に取り駆ける。

「はあ！」

「はあー！」

三人のコンビネーションに追い詰められていくAビルド。

《 ジカンギレード！ ジュウ！ 》

ドリルクラッシュャークラッシュャーを地面に刺し、【ジユウ】の文字が描かれた武器

【ジカンギレード ジユウモード】を召喚する。

《 フィニッシュタイム！ 》

クローザーのウオッチをセットし、ジユウを構える。

《 クローズ！スレスレシユータイング！ 》

銃から放たれたクローズドラゴン・ブレイズをAビルドを宙へ浮かす。

それを追いかけるように、クローズビルドがラビットのジャンプで跳びバットの翼で加速する。

Aビルドを追い越し、レバーを回す。

《 Ready go！ 》

ベストマッチドラゴンがクローズビルドの右手に取り込み、左手にはロボットの力がやどる。

「ハアアアアア！！」

両手でパンチを繰り出し、Aビルドを地面に叩きつける。

よろよろと立ち上がったAビルドの姿は、最初の赤と青【ラビットタンク】の状態だ。

「これで、決めるー！」

《 フィニッシュタイム！ 》 《 ビルド！ 》

ライドウオッチのボタンを押して、ベルトを回転させる。

この時、周囲には様々な数式が浮かぶが・・・

「なあ、戦兔。これ、算数だよな？（やべえ、分かんねえのある）」  
「まあ、あの子ぐらいなら上出来だ。（掛け算や分数。それに、プラスマイナスの式まで！）」

戦兔と万丈の会話や思考を知らないジオウは、ジカンギレード（ウオッチ外し済）を投げ捨てる。

《 ボルテックタイムブ레이크！ 》

放物線グラフのx軸で敵を拘束し、ラビットの力で跳びグラフに沿って蹴りを入れる。

Aビルドに当たった瞬間、足裏の無限軌道装置で敵の装甲を抉り取

る。

爆発を起こし、Aビルドを撃破する。

先程まで戦闘が行われていた場所、変身を解いた三人を夕日が照らしている。

「……そっか、記憶が無いんだな。」

「はい……」

「だった、自分の信じた物を貫け。」

最低最悪の未来に繋げたくないのなら、誰かの為にその力を使え。」

「……はい。」

「なあ、戦兔。俺達透けて無いか？」

万丈の言うとうり、戦兔達は透けていた。

「はあ、さつき聞いただろ。ここは新世界と彼女の世界が一時期的につながりかけた。」

その元凶が居なくなつて、元に戻ろうとしているだけだ。」

「戦兔さん、万丈さん。」

「ん？」

「次会うまでには、名前ぐらいは言えるようにします。」

「おう！ 楽しみにしているぞ！」

「俺達の力、君の世界のラブ&ピース為に使ってくれ！ じゃな！」

「……」

戦兔が消えたと同時に、先程の戦闘の傷跡も消えていた。

「どうやらビルドの力を継承したことによって、世界は元の戻ったようですよ。」

「この世界ではビルド及び、Aビルドは存在しなかつた。」

「戦兔さん達は？」

「ビルドの世界では存在してるかと。」

「そっか……」

夜の公園で、僕はノートに日記を書いていた。理由は無く、何となくで書いている。

「我が魔王、夕食です。」

「ありがとう、ウオズ。」

ウオズがコンビニで軽食を買ってきてくれた。

書いてた日記を閉じ、買って来てくれた物を食べる。

「？」

「どうされました、我が魔王。」

正面でパスタを食べてた、ウオズが聞いてくる。

「・・・何でもない。」

「なら、良かったです。」

これから、どうなるんだう・・・

今日の夜空は、人口の光で星が見えない。

## 第4話 「フルスロットルドライブ2018」

アナザービルドを撃破した我が魔王。

しかし、次なるアナザーライダーの影はすぐそこまで迫っていた……

「おはよう、ウオズ……」

激戦を終えた次の日の朝、起きた我が魔王は眠たげな眼をこすりながら、

私に向かって挨拶をしてきた。この顔にしぐさ、尊い……

なんて思っていたのもつかの間、一人の熱血刑事が私に手錠をかける。

「何をするー！」

「お前には、少女誘拐の容疑がかかっている！署まで来てもらおうー！」  
あつとゆう間に連行せれてしまう私。しかし我が魔王の必死の説得によって、

無実の証明がされた。我が魔王に慕ってもらえて……これ以上の幸福なんてあるか？

いや、無い！（確信）

署から出た私達を待っていたのは、新たなアナザーライダー。アナザードライブだった!?

すぐさま戦闘を繰り広げる我が魔王。しかし、奴の重加速により一歩的にやられてしまう。

クツソ、私も動けんぞ！

そこにやって来たのは異世界のレジェンド、詩島剛・仮面ライダーマツハだった。

マツハの活躍により、あと一歩のところまで追いつめるもアナザードライブに変化が！

黒色の廃車の見た目になったアナザードライブは力でマツハを圧倒。

しかし戦闘のさい、マツハが落としたシグナルチェイサーを手にした

我が魔王の活躍で、再び追い詰める！挟み撃ちでとどめを刺そうとしたその時！

今度は緑の姿に変え、我が魔王と助っ人の攻撃防ぐところか、カウンターをし逃亡する。

それを追う為、私はライドストライカーと言うバイクを差し出す。って、なぜ追わないんですか？我が魔王??

「ウォズ・・・僕・・・バイクに乗った事無いんだけど・・・」  
これは失念していた・・・

この戦いでは敵に逃走を許してしまった我が魔王・・・しかしこの時は誰も気付いていなかった、

かつて死神と呼ばれた追跡者の力を既に受け継いでいる事に・・・  
「状況は分かった！」

アナザードライブを取り逃がしてしまった我が魔王に手を指し伸ばしたのは、

私を逮捕しやがった熱血刑事・泊進ノ介だった。  
「今日のラッキーカーラーは、ピンクなんですよ！」

彼の案内の元やって来たのは、本願寺純の元だった。  
彼らの指導のもと、我が魔王はバイクの免許と戸籍を手に入れる。

流石、我が魔王！努力して、達成したその瞬間も愛おしい・・・  
おっと、つい忠誠心が鼻から出るところでした。

泊進ノ介の運転する車に乗り、アナザードライブが暴れる市街地に向かう。

「どうして、此処までしてくれましたか？」  
「急にどうした？」

「名前くれた事だけじゃない。この年でバイクの免許許可や戸籍を作ってくれるなんて・・・」

「時乃歩、あゆみ。女の子が生まれた時に、つけようと思っていた名前なんだ。」

たとえもった時間の中でも、歩みを止めず、誰かを守ってやれる優しい子になって欲しい。

って思ってた・・・俺はもう仮面ライダーに変身できない。

こうして、剛や歩に戦ってもらうことしかできない。出から攻めて、俺が出来る事をつてな。」

泊進ノ介・仮面ライダードライブから語られた言葉を聞いた我が魔王。

苦戦するマツハの元へと向かう！

「お前、何で来た！子供はさっがてろ!!」

「お前じゃない。」

「え？」

「僕は時乃歩。仮面ライダージオウだ！」

我が魔王の気迫に流石のレジエンドも、動揺を隠せない模様。

戦いの中二つのブランクウォッチが輝き、ドライブとマツハの力を継承する。

《 アーマータイム！ドライブ！ドライブ！ 》

祝え！熱血刑事の熱き想いと力を受け継いだ瞬間である！

「ひとつ走り付き合えよ！」

デッドヒートマツハとの共闘の末、ダブルライダーキックでアナザードライブを撃破する。

アナザードライブを倒した影響か、ライドウォッチにドライブの力が宿った為か、

もしくは両方の影響わからぬが、ドライブの世界とのつながりが無くなる。

個人を証明する物と受け継いだ力を残して。

また我が魔王、大きく成長なされた……